

柳と沖縄そして工芸の現状と日本民藝館 80 周年

外間一先¹⁾

YANAGI and Okinawa

Okinwan Crafts stored in the Japan Folk Craft Museum at its 80th anniversary

Kazuyuki HOKAMA¹⁾

1. はじめに

初めて私が東京にある日本民藝館^{注)}を訪れたのは、平成 27 年 5 月のことである。春のさわやかな風が吹き、初夏を感じさせる陽気が時折みられるなか、大谷石と木造建築の日本民藝館に到着した。なぜ、民藝館を訪問したかという同館は平成 28 年に創設 80 周年を迎え、その年に同館が収蔵する沖縄関係資料の展覧会を沖縄県立博物館・美術館において開催する準備のためであった。私は 4 月に県立那覇国際高等学校から転勤し「外間さんが日本民藝館 80 周年展の担当です」といわれ「あの教科書に出ている柳宗悦だ」と驚きながら希望と不安を抱え東京に向かったのである。日本民藝館では杉山享司学芸部長をはじめ学芸員の方々に資料や柳宗悦、兼子夫人のなどを解説いただいた。陶磁器や染織などの工芸品はもちろん柳本人がデザインしたという同館の雰囲気全体に感動し、柳宗悦の民芸に関することや沖縄との関わりについて学び始めたのがきっかけである。今回は、日本民藝館や柳宗悦のことを紹介しつつ、彼らが沖縄に感じた魅力や現在の沖縄の工芸の現状などに焦点をあて、日本民藝館 80 周年展を沖縄県立博物館・美術館で開催する意義などを考察する。

2. 日本民藝館及び柳宗悦について

それではまず、日本民藝館はどのような場所で、どのような活動をしているのか。また創設者である柳宗悦のことについて説明をする。日本民藝館創設 80 年、柳宗悦ら民芸運動家一行が初来沖から 77 年という月日が流れ、世代交代が進むなか、今一度、沖縄との関わりを確認しておくことは極めて意義のあることだ

と思う。

(1) 日本民藝館とは

(雑誌民藝 2014 年 11 月号より)

日本民藝館は、1936 年(昭和 11 年)、柳宗悦により企画され、実業家の大原孫三郎をはじめとする多くの賛同者の援助を得て、東京都目黒区駒場に開設された。初代館長には、柳宗悦が就任。陶磁器、染織品、木漆工品、絵画、金工品、石工品、編組品など、日本をはじめ諸外国の工芸品が蒐集された。現在、日本民藝館には約 1 万 7 千点のコレクションが収蔵されており、地域性や民族性が色濃く反映された特色ある蒐集品がそろっている。

また日本民藝館の建物は、柳宗悦自身の設計デザインによるもので、1999 年(平成 11 年)に国の有形文化財に登録された。本館の向いには旧柳宗悦邸が建ち、現在は西館として柳の書斎や妻の兼子記念室、母屋の食堂などが第二、第三の水曜日と土曜日に一般公開されている。

現在の経営母体は公益財団法人で、登録博物館として運営。「民藝品の蒐集や保管」「民藝に関する調査研究」「民藝思想の普及」「展覧会」を主たる仕事として活動している。その日本民藝館は、来年度設立 80 周年を迎えることになる。

(2) 柳宗悦と民藝について

(『柳宗悦のこと』雑誌民藝 2009 年 9 月号より)

日本を代表する思想家の一人であり民藝運動の創始者である柳宗悦は、1889 年(明治 22 年)に現在の東京都港区に生まれた。父・権悦は海軍少将で和

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1 Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006 Japan

算家としても知られた人物で、母・勝子は嘉納治五郎（教育家で講道館柔道の創始者）の姉にあたる。

学習院に学んだ宗悦は、1910年（明治43年）に文芸雑誌『白樺』の創刊に参加。宗教や哲学の分野に強い関心を示し、宗教哲学を論じたり西欧近代美術の紹介につとめた。

1913年（大正2年）に東京帝国大学哲学科を卒業。翌年に声楽科の中島兼子と結婚し、千葉県我孫子へ転居。妻は後に日本を代表する女性声楽家として活躍した。

宗悦は我孫子時代に朝鮮陶磁器の魅力に惹きつけられていく。そして、その魅力を生み出した朝鮮の人々に限らない敬愛の心を寄せるとともに、民間で用いられる日用品の美しさに目覚めていったのである。

その眼が自国へと向けられていった時、まず宗悦の目を惹きつけたのは木喰仏と呼ばれる江戸時代の木彫仏であった。1925年、その調査の旅の中で発見した各地の手仕事や京都の朝市での下手物の蒐集などを契機として、新しい「美の思想」を確立し、これを民芸（民衆の工芸の略）という二字で現したのである。

1936年（昭和11年）に日本民藝館を開設し、初代館長に就任。東北や九州の民芸を調査し、沖縄には1938年（昭和13年）に初めて足を踏み入れる。

（3）琉球の人文

昭和13年から15年にかけて日本民藝協会の柳宗悦をはじめ、河井寛次郎、浜田庄司らがあいついで来県し、沖縄の民芸を調査していく。もっとも大きな調査は昭和14年の暮れから翌15年にかけて総勢26名による「琉球観光団」であり、旅行中に坂本万七や土門拳らによる写真撮影も行われた。柳らの調査は、沖縄の工芸のみならず文化全般にわたって行われており、『柳宗悦選集第五巻 琉球の人文』から柳が沖縄の工芸や文化の豊かさ、美しさを目の当たりにした驚きと賞賛を読み取ることができる。

もくじ（『柳宗悦選集第五巻』より）

琉球の富

沖縄の民藝

沖縄語問題

琉球文化の再認識に就いて

沖縄人に訴ふるの書

芭蕉布物語

現在の壺屋とその仕事

田中俊雄著『沖縄織物裂地の研究』序

芹澤銈介著『琉球の形附』

沖縄の思ひ出

内容 「琉球の富」について

「琉球の富」の章では、地理上の沖縄の位置、植生や生物のことに触れ、沖縄各地の風景と首里の建築物や彫刻、さらに文学や音楽、舞踊、工芸に見るべき固有の文化が種々栄えていると指摘することから始まる。大洋に浮かぶ小さな島で、一千年の文化史をもつものは世界でも例がないだろうと述べている。さらに当時の沖縄像について、「中国の影響が大きいだろう」「こんな小さな貧乏な島はほかにない」「台湾の蕃地」などのイメージをあげ、これらの沖縄像に対し、柳は「沖縄に於いてほど古い日本をよく保存している地方はほかにない」「（経済的には貧しいといえるが）人文的に見るならば驚くべき財産をもつ国といへる」と切り返し、「私達は優れた沖縄を語りたいのです。それは私達を明るくし島の人々を明るくさせるでせう。～中略～沖縄について嘆く人々のために、又この島について誤った考へを抱く人々のために、又自國を余りに卑下して考へる土地の人々のために、この一文が役立つことを望んで止まないのです。」としている。

その後は、墳墓・首里・本萱瓦・琉語・和歌・音楽・舞踊・琉装・染物・織物・陶器をそれぞれ取り上げ、その魅力を解説している。また附記として彫刻や食物、漆器や行事などもまとめて取り上げ「琉球よ、榮あれ」という言葉で締めくくっている。

3. 沖縄の魅力とは？（柳自身の）自らの民藝の思想について

柳宗悦によって称された「民芸」という言葉は、「民衆的工芸」の略称であることは前述してあるが、それは一般民衆の間で作られ、民衆の間で使われる健康的で、簡潔な美を備えた工芸品のことを指しているといえる。柳は、いわゆる名も無き民衆が、あるがままに作り出した日常生活のための道具に美しさを見だし、全国を調査し、蒐集に取り組むなか沖縄を発見する。沖縄では、離島で経済的に貧しい地域ではありながらも明るく素朴で力強い人々に出会い、彼らがつくる健康的な工芸品に魅了される。

それは伝統的に受け継がれてきた工芸を原材料や



写真1：日本民芸館の正面入り口



写真2：民芸著書（沖縄県立博物館・美術館蔵）

技法において多少の改良を加えながらも守り育ててきたこと。また、祖先崇拜の心や精霊への信仰などが生活でも仕事でも中心となり、工芸の神髄となっているという沖縄の姿に驚嘆したのだといえる。

ところで、柳宗悦は昭和2年に『工芸の道』（柳宗悦選集 第一巻）という著書を出している。それは沖縄を訪れる前のことであり、柳はすでに「工芸の思想に関する思想の建設」に取り組んでいる。宗教的な大いなる力を合わせながら「工芸の美」を説明している。そこでは「下手と蔑まれる器は、不思議にも美しい器たる運命を受ける」と指摘し、その美しさを「用の美」と表現し、実用品であることが美しくしたと説明している。さらに、名も無き一般の民衆がどうして美しい工芸品をつくるのかという理由をあげ、それは「よき作り手」の存在であり、作り手の奉仕の心、そして健康さであるという。さらにその「驚くべき美しさ」は「他力道」であり、無心の作り手を導いていると述べる。他力とは、自然や伝統、実用品であることで、それが素晴らしいものをつくる大きな力だとしている。

つまり、柳宗悦らは、沖縄において数々の工芸品及び言葉や音楽などの沖縄文化を発見するが、彼らはただ単にももの形を見て美しいというだけでなく、その背後にある自然や伝統、信仰など他力的なものまで関連づけて美しさを見いだしたといえる。後に柳は「私達は宝の山に入ったような想いでありました」というほど心をうたれていたのだ。

4. 沖縄における工芸の現状

こうした沖縄の工芸について、今日の状況を確認してみる。まず経済産業省による大臣指定伝統工芸品

の品目数は2015年現在では日本全国で222点を数え、織物・漆器・和紙・人形・染色品・木工品竹工品・金工品・陶磁器などがあげられる。指定品目が多い都道府県は京都府が最多の17点で、次いで新潟県、東京都が16点、3番目に沖縄県の14点となっている。九州地方の福岡～鹿児島県の7県の総数が21点であることから、全国3位の沖縄は小さな島でありながらも伝統工芸品の宝庫であるといえるだろう。

また沖縄県が進める第7次沖縄県伝統工芸産業振興計画（平成24～28年 計5年）に工芸産業の現状と課題があげられている。現状についての報告では平成22年度における本県工芸産業の生産額は41億3,400万円となっており平成18年度との対比では13.0%（6億1,500万円）の減少となっている。その生産額は昭和57年度の57億5,500万円をピークに増減を繰り返しながら次第に減少している。現在はピーク時の7割程度の水準であると指摘している。さらに工芸産業従事者数においては平成22年度末に1707人、事業所数は718事業所となっており、平成18年度との対比では、従事者数は24.2%（546人）の減少、事業所数は19.1%（170事業所）の減少となり、ピーク時と比較するとそれぞれ半数以下という状況である。そして工芸産業の課題として 市場変化への対応（多様化する消費者嗜好や流通形態など） 経営の高度化と基盤の強化（組合機能の充実化など）

人材の確保と育成（従事者の高齢化と従業員数の減少について） 原材料の安定確保（天然材料確保や輸入原材料への対応） 販売力の強化と販路の開拓 ブランドの確立 拠点施設の整備を挙げている。

5. 民芸よ再び

さて、平成 28 年度に日本民藝館は創設 80 周年を迎える。そして収蔵する沖縄関係資料の展覧会を沖縄県立博物館・美術館で秋に開催する予定である。柳ら一行が来沖した昭和 13 ~ 15 年を中心に、蒐集された資料である。前述したように沖縄の民衆が手仕事によってつくり、自然に支えられ生活に根付いた工芸品の美しさに感動し、驚いた彼らが蒐集した資料である。私は、間近に観覧したいと思う。またその資料は陶器や染織、織物、漆器、おもちゃ、木工など種類が多く、柳らがどのような造形美や文様に美しさを見いだしたかをあらためて観察したいと思う。

昭和初期の資料は戦争をくぐり抜け、貴重な資料であることは間違いないが、一方で古い物はいいということだけではなく、また沖縄をノスタルジックな気分で振り返るだけでなく、今後の工芸にも思いを馳せることができないかと考える。

全国でも有数の工芸の地である沖縄においても生産額など減少傾向にある中、あえて今回は沖縄から工芸運動を盛り上げ、その美しさや良さを発信すべきであり、日本民藝館 80 年展はそのチャンスとなりえるだろう。沖縄のブランド確立や当館がその魅力を発信する施設として貢献することができる。今日では大量生産の工業製品にない手作りの工芸品の持つ素朴さや個性が見直されつつある。工芸産業は、観光土産品や生活必需品、ファッション、インテリアなど幅広い分野において、大きな発展の可能性を有していると思われる。

柳が蒐集した沖縄関係資料から刺激を得て新しい

デザインや工芸品を作り出す発想のヒントになりえると考える。また使い手は、柳が「民芸」と名付けた工芸品を使用することでその背後にあるものを再考する機会になりえるだろう。それは例えば品物を選ぶ時に材料を気にかけることであったり、職人の手仕事の技に思いを馳せることである。

当館で開催される日本民藝館 80 年展が民芸思想の根幹でもある健康の美や実用の美を兼ね備えた丈夫で長持ちするもの、使いやすく、実生活で使うことで喜びが得られるような工芸品を使用することになるきっかけになってほしいと考える。

参考文献

沖縄県 第 7 次沖縄県伝統工芸産業振興計画 平成 24 年 3 月

尾久彰三 柳宗悦の民藝と巨匠たち展 2005 年 イ・エム・アートワーク

日本民藝協会 雑誌民藝(2009,9 月号 2012 年,9 月号 2014 年,11 月号)

日本民芸協会編 柳宗悦選集 第一巻~第三巻 1954 年 春秋社

日本民芸協会編 柳宗悦選集 第五巻 1954 年 春秋社

日本民藝館 柳宗悦展 2013 年 NHK プロモーション

柳宗悦 民と美 上下巻 1948 年 靖文社

注)施設名や引用部分などで適宜旧字体を使用する。